

令和8年度

帝塚山学院泉ヶ丘高等学校
入学者選抜試験問題

1次・帰国生入試

国語

(試験時間 50 分)

| | |
|------|--|
| 受験番号 | |
|------|--|

注意事項

- 文字は大きく、ていねいに書くこと。
- 解答用紙の^{わく}枠からはみ出さないように書くこと。
- 字数制限のある問いは、記号や句読点も一字と数えること。

□ 高校生の千尋は、クラスメイトである透子の言葉のセンスに一目置いていたが、二人の間に友人関係はなく、普段は別々の友人グループで過ごしている。ある日の昼休み、千尋は親友のたえちゃんと二人でお昼ご飯を食べていたところ、透子と香奈美と一緒に教室に入ってくるのを見かけた。千尋はたえちゃんとの会話に集中しようと思いつつも、つつい透子のことが気になってしまう。その場面に続く次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお設問の都合上、本文の一部を改変している。

① 予想した通り、香奈美と透子は教室に入って早々に別れ、香奈美は足立さんの席へ向かった。教室の前のドアから、透子のグループの子達四人が入ってきて、その中の一人、吉田真智が透子に気づき、「どこ行ってたん。食堂かと思って見に行つたのに」と声をかけた。

「ごめん、ウンコするん恥ずいから三階のトイレ行つた」

「なにそれ」

「恥ずいやん」

恥ずかしい行いを報告することは恥ずかしくないのかと、千尋は透子の話しぶりを羨ましく思った。千尋がたえちゃんをトイレに誘う時は尿意を催したときだけで、便意を他者に打ち明けたことはない。

透子のグループは、食堂で昼食をとることが多い。たまに教室で食べる場合は、グループの中の二人、吉田真智と近藤ひかるの席が隣接しているので、その二つの机を囲って座っていた。しかし今日は、近藤ひかるの席には先客がいた。

「あ」

透子たちに気づいたその二人は、慌ててお箸を置いた。

「あ、ごめん、食堂行つたんかと思って、移動するな、ごめん」

「ごめんなー」

吹奏楽部に入っているおとなしい二人だった。一人が近藤ひかるの後ろの席で机にお弁当を広げ、もう一人が近藤ひかるの椅子に座っている。しかし千尋のように椅子を後ろ向きにせず、前に向けたままの椅子に横向きで座り、体を後ろにひねってお弁当を食べていた。

「あーいいいよ、うちら透子の席行くから、使ってて」

「大丈夫大丈夫、自分の席行くから、ごめん、食堂かと思つて、ごめんごめん」

① 始まつた、と思つた。この譲り合いにはなにかの力が働き、その末に決着する。千尋は耳をふさぎたいのに、体はこれまでになくやり取りに集中している。

「ほんまに大丈夫やで」

近藤ひかるは二人を制するように透子の席へ歩き出していたが、同時に二人も②「ごめん」を繰り返してお弁当の袋を両手で持ち上げている。

千尋は、近藤ひかるの「あ」を聞き逃していなかった。自分の席に座ることを許可するなら、二人を見た時点でそのまま何も言わずに透子の席に向かえばよかった。なのに、「あ」と漏らして存在を気づかせ、申し訳なさを持たせた状態を作つてから、改めて許諾する。やさしい私、を他人にも自分にも植え付ける。

近藤ひかるが他人を許し、自分を好きになる時間。③そんなものに巻き込まれるなんて。千尋は部活に入っていなかったが、中学では吹奏楽部だった。二人に自分を重ねる。属性、なんていう気分の悪い言葉がよぎってしまう。

この場合、自分の発した主張が通つたほうに軍配が上がつたことになるのだろうか。食事をしている途中に別の席に移動するなんて絶対に億劫なはずだが、どっちにしる他人に気を遣わせたことを気にしながら食事を続けるのも、二人は気分が良くないだろう。

千尋は瞬間的に、透子だ、と察した。きっと透子の次の言葉で全体の動きが決まる。透子が近藤ひかるの後に続けば、吹奏楽部の二人は手に持つたお弁当を机に戻し、「ありがとう」と感謝を述べて昼食を続ける。

透子が口を開いた。しかし思つていたよりもずっと低い声で、「違ふとこで食べた方がいいで」と冷たく二人に言い放つた。その場にいた全員が、透子の顔を覗いた。

「え？」

透子はさらに眉をひそめ、半端な体勢になつた二人を睨んでいる。

「なんでなんっ」

緊張感の走つた場をとりあえずならすために、吉田真智がわざとらしく声を張つてたしなめる。すると透子は表情を崩し、

「ひかるの席、めっちゃ汚いねん。ごはん食べるようなとこちゃう」と言った。

それを聞いた二人は、④心から安心したように笑った。グループの他の三人も笑いを含んだ声で「汚い」「たしかに汚い」と口々に続ける。

透子は二人に「ごめんな、先に言わずに」と顔の前で手を合わせた。

「おい！ いつも使わしたってるやる」

「私は特殊な訓練受けてるからいけるねんけどな」

近藤ひかるが踵きびすを返し、持っていたお弁当箱で透子の背中を叩く。

「早く早く、別の席に逃げて」

救助隊員のようなジェスチャーをして二人を席から離し、透子は腹を決めたようなわざとらしい表情で近藤ひかるの席に座る。あとはもう、まわりが透子に続くだけだった。

なんていう技だろう。千尋は透子独自の鮮やかな解決劇に放心していた。

人ひとり分しか通れない狭い道の入り口で、他人と道にはいるタイミングが重なったとき、相手に道を譲るよりも先に行くのが本当の優しさだと聞く。両者が譲り合ってしまうと、決定づける要素が不確定なので結果が出るまで時間がかかり、結果お互いのロスになる。

けれどこの場合、席の所有者と使用者という、置かれた立場が違っていたので、お互いに譲らないでいること、つまり相手の譲りを受け入れてあげるのはなかなか難しいだろうと思った。相手に譲った方が動くという構図であるために、より譲りたい欲が増す場面でもある。

しかし冷静に側から見て、近藤ひかるの方が優勢であるように見えた。そこへ、近藤ひかる側の透子が、⑤彼女にしかできない方法で、いとも簡単に決着をつけた。それも二人を悪者にする事なく。そして、近藤ひかるを少しだけ不快にさせて。もしかしたら。

確証は持てない。でももしかしたら、透子も近藤ひかるの X に引っ掛かったのではないか。あるいは、日頃から近藤ひかるのそういった自己愛の構築方法に思うところがあり、なにかの機会にたしなめてやりたいと、無意識に考えていたので

はないだろうか。

どちらにしても、⑥透子は到達している、と千尋は感じる。天性のコミュニケーション能力では説明できない、経験や、大げさに言えば度胸といったものに裏付けされた、生きていく上で重大な何か、千尋には足りていない何か、にすでに到達していると思わざるを得なかった。

(加納愛子『かわいなくて』)

⑩ 1 予想した通り……千尋は、透子と香奈美が普段は別々の友人グループで過ごしていることから、二人が教室に入っ
た後はすぐに別れて、それぞれのグループに合流するはずだと予想した。

(一) — ① 「始まった、と思った」とあるが、この時の千尋の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア ふいに席の譲り合いが始まり、その結末を見届けずにはいられなくなっている。

イ 座席の譲り合いが続いた結果、大きなもめごとに発展しないかと心配している。

ウ もめごとが起きそうな予感が当たり、なるべく関わりたくないと考えている。

エ 互いに座席を譲り合い、意味のないやりとりが繰り返されることに呆あきれている。

(二) — ② 「『ごめん』を繰り返してお弁当の袋を両手で持ち上げている」とあるが、吹奏楽部の二人が近藤ひかるの申し出を受け入れないことについて、千尋はどう考えているか。次の説明の□に当てはまることばを本文から四十字で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

千尋は、と考えている。

(三) — ③ 「そんなものに巻き込まれるなんて」とあるが、この時の千尋の気持ちについて、六十字以内で答えなさい。

四——④「心から安心したように笑った」とあるが、この時の吹奏楽部の二人についての説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 透子が面白おかしく近藤ひかるをたしなめてくれたおかげで、自分たちが移動することなく食事ができるとわかって気が楽になり、透子の冗談を笑う余裕ができています。

イ 最初は透子に睨みつけられて緊張していたが、近藤ひかるの席を汚いという透子の意外な発言に共感を覚え、さっきまでの不安を忘れて笑ってしまっている。

ウ 席を移動するように言ってきたのは、透子自分たちに敵意を持っていたからではないとわかって安心し、透子の発言のおかしさを楽しむことができている。

エ 透子から冷たく扱われて悲しく思っていたが、それは透子自分たちを笑わせて場を和ませるための演技だとわかり、不安から解放されて思わず表情を緩めている。

五——⑤「彼女にしかできない方法で、いとも簡単に決着をつけた」とあるが、その説明として適当でないものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 吹奏楽部のおとなしい二人を、救助隊員のようなおどけたしぐさで近藤ひかるの座席からうまく引き離れたこと。

イ 近藤ひかるの主張が通りそうだった場面で、吹奏楽部の二人に申し訳なさを感じさせず問題を解消したということ。

ウ あえて低い声で吹奏楽部の二人に声をかけることによって、場に緊張感を生じさせ、二人を威圧したということ。

エ 近藤ひかるの席に座ることを「特殊な訓練」と表現し、透子たちが座席を使用することに正当性を持たせたこと。

六 X には、ここまでの近藤ひかるの発言があてはまる。適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 「ごめん」

イ 「あ」

ウ 「え？」

エ 「おい！」

(七)——⑥「透子は到達している」とあるが、この時の千尋の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 自分には到底できない、透子の人生経験と大胆さによって成し遂げられる立ち居振る舞いに感心している。

イ 自分にはない、天才的なコミュニケーション技術を手に入れることができた透子のことを羨んでいる。

ウ 透子のようなコミュニケーション技術は、経験だけでなく度胸によって手に入るのだと思いき知らされている。

エ 生きていくうえで重大な何かとは、生まれつきでしか得られないものであるという真理をかみしめている。

(八) 千尋からみた登場人物についての説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 近藤ひかるは優しい性格なので、自分の席を使用していたクラスメイトに対して、快く座席の使用を認めた。

イ 透子は歯に衣着せぬ物言いので近藤ひかるの座席の汚さを本人に指摘し、不潔である近藤ひかるをたしなめた。

ウ 吹奏楽部員たちは、他人の席で食事を続けることを申し訳なく思いつつ、面倒なので移動しようとしていない。

エ 透子の友人である吉田真智は、透子の発言によって張りつめた空気を変えようとして、声を張って発言していた。

(九) 本文の内容についての説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 昼休みの座席の譲り合いに現れる複雑な人間感情が、千尋の主観的な視点によって臨場感をもって表現される一方で、

斬新な解決法で注目されようとする透子の抜け目なさが描かれている。

イ 昼休みの座席の譲り合いという些細なトラブルが、千尋の冷静な視点によって分析的に表現される一方で、千尋には予

測できないような言動をする透子の存在が際立っている。

ウ 昼休みの座席の譲り合いという日常的なもめごとが、千尋の観察的な視点によって理屈っぽく表現される一方で、千尋

の期待を裏切り続ける透子の言動が物語に違和感をもたらしている。

エ 昼休みの座席の譲り合いに現れる強者と弱者の立場が、千尋の批判的な視点によって具体的に表現される一方で、常に

弱者の立場に寄り添おうとする透子の正義感が強調されている。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 村で暮らしている人間にとっては、動物に対する評価は今日でも複雑である。私が暮らす上野村だけでなく、一九九〇年代に入った頃から作物の動物による被害がほとんどの山村で激しくなっている。ジャガイモ、ヤマイモ、大豆が食べられてしまうのはイノシシの仕業で、大豆はサルが食べにくることもある。サルはネギ、シイタケ、果物、ときにカボチャやスイカ、白菜なども狙ってくる。もうひとつ被害の大きい動物にシカがいる。シカは葉のあるものなら何でも食べる。イノシシのいない東北の山村以外では、ほとんどの山村でイノシシ、サル、シカが田畑を荒らしていて、村人は困りはてるようになった。

このような状況が発生しているのだから、これらの動物は村人にとっては害獣である。しかしこんな事態になってもなお、村人は動物に対して、同じ村に暮らす仲間だという意識ももっている。村という言葉は、伝統的には、人間社会を意味する言葉ではなく、自然と人間の暮らす社会をさしている。とすれば動物もまた村のメンバーであり、共同体の仲間である。

実際村人は、動物をみる多様な視線を並存させてきた。ある種の動物は、ある場合では害獣である。しかしその前に村に暮らす仲間で、ところがその動物は冬の猟期には狩猟の対象にもなる。その一方で人間以上の能力をもった生き物として尊敬され、さらに神の世界への道筋を知っている霊力をもっているとあがめられることもある。こういうかたちで語られるときの神とは、自然そのものであり、自然の真理とでもいふべきものであるのだが。

このように述べていくと、人間と動物の関係が矛盾しながら重なり合っていることに気づかれるであろう。仲間だといながら猟の対象にもする。尊敬を払いながら、害獣ともみなす。どう考えても、矛盾した関係が並存しているのである。

それを② 人間がもたざるを得ない絶対矛盾としてとらえるのが、日本の伝統的な民衆精神だったのではないかと私は思っている。

もちろん、生きるために、ときに動物から畑を守り、ときに動物を獲って食べたり皮を得たりすることは許される。なぜ許されるのかといえば、自然の生き物たちもまたそうしているからである。鳥は木や草の実を食べるし、キツネは野ネズミや野ウサギを追う。虫は草や木の葉を食べる。自然がそのような関係になっているなら、自然の一員としての人間にも同じことが許されるはずだ。

ところが人間はややこしい問題を背負わされている。それは自然の生命を採取したり、動物と対立したりする理由が、純粹

な生命的な行為なのか、それとも自分の「欲」がからんだ行為なのかを明確にできない、という問題である。

たとえば狩猟によって動物を捕獲するとき、それがキツネやタカ、ワシと同じことならそれは「自然の行ない」である。

(1) 人間は「自然の行ない」としてそうするだけでなく、狩猟によって富を得ようという意識をもつし、一つの自己主張、自己表現として狩猟をおこなうという面をも併せもつ。後者は「自然の行ない」ではなく「自己」、あるいは「我」、「個我」をもつ「人間の行ない」である。「自己」があるから自己目的が生じ、それがときに富の増加をめざさせ、ときに自己主張や自己表現を目的意識として生じさせる。

() ※ ※ ※ ()

とすると③このような「人間らしさ」は肯定できるのか。

私は「できない」と日本の民衆は考えてきたのではないかと思っている。ここでいう日本の民衆とは、自然とともに、自然のなかで暮らしてきた村の人々のことであり、都市の人々はとりあえず除外して、私は④この言葉を、ここでは、用いている。そうしないと自然とともに生きた人々の精神を明らかにすることができないからである。

それが「自然の行ない」なら肯定できるが、「自然に反する行ない」なら肯定できない。しかしそう考えたとしてもまだ問題は起きる。なぜなら人間には、「自然の行ない」と「自然に反した行ない」との間に、区別しきれない部分があるからである。

たとえば富を蓄積したいと考えたときでも、そのことによって権力を得ようとか、裕福な暮らしがしたいということなら、明確に自然に反するだろう。(2) 自然の生命たちは、そんなことは考えないからである。ところが将来訪れるかもしれない苦境に備えるために、多少は富を蓄積しておこうというのならどうなるのか。自然の生き物でも、リスや野ネズミなどは、多少の食料を備蓄するし、蜂は冬を越すために蜜を貯めるのである。とすると多少貯めこむのは生きるための行ないといえなくもない。

しかし、それでもなお⑤人間がおこなう貯えは、自然界の生き物のそれとは違っている。ひとつに自然界の生き物は必要量しか蓄積しないが、人間はその必要量がわからないから、不安がある限り貯えを増やしつづけることになる。もうひとつは、たとえばリスや野ネズミも匿しておいた木の実などを食べきらずに、そのまま残してしまうことがある。ところがそのことによつて木の実が遠くに運ばれ、木にとってはそれがむしろ有効性をもつ。(3) 残すことが無駄になつていないばかりで

なく、自然というつながり合う世界から、リスや野ネズミの行為は離れない。それに対して人間の同じような行為は、あくまで自己自身のため、せいぜい家族のための自己目的的行為であり、つながり合う世界が消えているのである。

(4) わずかな貯えでもいけないのか。それを否定されてしまったら、生きつづけるという行為自体が人間には成り立たない。

問題はこの両者の境界線がわからないことにある。なぜそうなってしまうのか。それは人間が自己自身の生に対する不安をもっているからであり、そうである限り不安が解消されなければ、自分の課題も終了することがない。不安をとおしてものを考えるから、解消されるまで際限がない。しかも生に対する不安は個人的なものだから、結び合う世界をもちえないのである。

(内山節うちやまふみ『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』)

(一) ①「村で暮らしている人間にとっては、動物に対する評価は今日でも複雑である」とあるが、筆者の考える「村で暮らしている人間」の動物に対する「複雑」な評価とはどのようなものか。それを具体的に述べた部分を、(※※※)より前の本文中から四十文字以内で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

(二) ②「人間がもたざるを得ない絶対矛盾」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 生きるためになんらかの他者の生命を奪う以外、ほかに方法を知らないこと。

イ 人間は自己意識を持つているために、他者との関わりを考えざるを得ないこと。

ウ 動物に対する相反するとらえ方を、解消できないものであると考えること。

エ 人間に危害を加え、そのうえ田畑の作物を荒らす動物を害獣と見なすこと。

(三) (1) (4) に入ることばを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

ア つまり イ それなら ウ ところが エ なぜなら

四——③「このような『人間らしさ』とあるが、「人間らしさ」にカギカッコ(「」)をつけている筆者の意図の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 人間らしさとは通常は人間特有の温かさや魅力と結びつく表現だが、ここではその温かさをいっそう際立たせるためにカギカッコが用いられている。

イ 人間らしさとは通常は人間特有の温かさや魅力と結びつく表現だが、ここでは「自然」との違いをはっきりさせるためにカギカッコが用いられている。

ウ 人間らしさとは通常は人間特有の温かさや魅力と結びつく表現だが、ここでは広く「自然」も含んだ言い方であると明らかにするために用いられている。

エ 人間らしさとは通常は人間特有の温かさや魅力と結びつく表現だが、ここでは通常とは違い人間の行為が欲とからみやすいことを表すために用いられている。

五——④「この言葉」とあるが、その内容として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 日本の民衆 イ 「人間らしさ」 ウ 「できない」 エ 村の人々

六——⑤「人間がおこなう貯えは、自然界の生き物のそれとは違っている」とあるが、「自然界の生き物」と「人間」とでは「貯え」はどのように違うのか。自然界の生き物と人間との対比をふまえて、次の文章の□に入ることを四十五字以内で答えなさい。

自然界の生き物は、必要量以上を貯め込まないのに対し、人間は不安から必要量以上を貯め込んでしまうと云える。また、

四十五字以内

と云える。

七 本文の内容と一致しないものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 人間は自然のままに生きられないが、それを昔の日本の民衆は肯定的にとらえていた訳ではない。

イ 人間は自分の「我」を捨てることができず、際限なく貯えを増やしていこうとする傾向がある。

ウ 人間はもともと動物と同じように生きていて、他の生き物の生命を採取することがあった。

エ 人間は時に動物と対立するが、それが自然な行為かそうでない行為かをはっきり区別できる。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 撰津の国、ふきやといふ所に、下女ありけり。夏、昼寝したりけるに、家の② 垂木に大きな蛇まどひつきてありけり。③ この女の上にて尾をば垂木にまどひて、頭を下げて落ちかからんとしけるが、また引き返し引き返すこと度々になりけり。女の夫、「④ 不思議のやうかな」と思ひて、「⑤ ことのやう見果てん」と思ひて、追ひも退けずして、隠れよりのぞきめたり。⑥ かく度々しけれども、いかにも落ちかからざりければ、怪しくて女を寄りて見れば、⑦ かたびらの胸に大きな針を刺したりけるが、きらきらとして見えけり。「もしこれに恐るるか」と思ひて、針を抜きて、またもとの所にて見るに、やがて蛇落ちかかりにけり。その時、寄りてうち放ちつ。すなはち女⑧ 4 おどろきて語りけるは、「夢にもあらず、現にもあらず、美しき男の来て、われを⑨ 5 懸想しつるを、なんぢ来て、追ひさまたげつるなり」とぞ言ひける。されば、X。わづかなる針にだに毒虫恐れをなすこと⑩ 6 かかり。⑪ 7 いはんや太刀においてをや。必ず武勇を立てずとも、守りのために持つべきことなり。

〔古今著聞集〕

① 撰津の国、ふきやといふ所……現在の大阪府北部から兵庫県東部にかけての地域にあつた地名と考えられる。

② 垂木……屋根を支えるため、屋根の下に斜めに取り付けられている木材。

③ かたびら……着心地を涼しくするために、裏地を付けていない夏用の衣類。

④ おどろきて……目を覚まして。⑤ 懸想しつる……好きになり言い寄った。

⑥ かかり……このようである。⑦ いはんや太刀においてをや……まして太刀はなおさらだ。

(一) ① 「この女の上にて尾をば垂木にまどひて、頭を下げて落ちかからんとしける」とあるが、この様子は本文後半にある女の発言中のどの部分に対応するか。当てはまる箇所を二十字以内で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

(二) ② 「不思議のやうかな」とあるが、どのようなことについて「不思議」と感じていたのか、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 大きな蛇が今にも落ちてきそうなのに、妻は少しも気づかないで昼寝をしていること。

イ 夫がすぐ近くで見ているのに、大きな蛇はまったく気づかず、妻を狙っていること。

ウ 大きな蛇が垂木からぶら下がり、妻に迫^{せま}っては引き返す動作を繰り返していること。

エ 垂木に尾を引っかけているだけなのに、大きな蛇が下までは落ちて来ないこと。

③ 「このやう見果てん」、⑤ 「必ず武勇を立てずとも」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。

③ 「このやう見果てん」

⑤ 「必ず武勇を立てずとも」

ア この成り行きが恐ろしくて最後まで見ていられない

ア 必ずしも太刀としての使い方を究めなくても

イ この成り行きが気になるから最後まで見届けよう

イ 必ず太刀として正しく使って出世をなすとげ

ウ こんな不思議な光景はすっかり目に焼き付けよう

ウ 必ず太刀としての使い方を学んで武士になり

エ こんな不思議な光景は今まで目にしたことがない

エ 必ずしも太刀として使い手柄を立てなくても

④ 「かく度々しけれども、いかにも落ちかからざりければ」とあるが、なぜ「落ちかから」なかったと考えられるか。

その理由を、主語を明らかにして本文中のことばを使い、三十文字以内で答えなさい。

〔X〕にあてはまることばとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 人の身には鉄の類^{たぐひ}をば必ず持つべきなり

イ 蛇を退^のくるには必ず守りの鉄を持つべし

ウ 女はいたづらに昼寝など致すべからず

エ 男は女の身を思ひよくよく思案すべきなり

(六) 本文の内容と合うものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 女は、大きな蛇が自分を狙っていることに、途中から何となく気づいていた。

イ 夫は、大きな蛇が妻の上に落ちてきたのを見て、恐ろしくなって逃げ出した。

ウ 女は、夢とも現実ともつかない光景の中で、美しい男と自分の夫の姿を目にした。

エ 夫は、妻自身を守るためのものを、必ず衣類に付けておくようにも言っていた。

【四】 次の(1)～(6)の——を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 江戸時代のホウケン的な体制。
- (2) この工芸品はすばらしいイシヨウが施されている。
- (3) 大切な書類をフンシツする。
- (4) ハンセンに乗って大西洋を横断する。
- (5) 先生の前でうっかり口がスべる。
- (6) オドすような口調で詰め寄る。

【五】 次の(1)～(4)の四字熟語の□に入る漢字一字を書きなさい。またその四字熟語が「」に最もよくあてはまるものを、後の〈例文〉ア～オから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

- (1) □ 善懲悪
- (2) □ 刀直入
- (3) 有名無□
- (4) 泰然自□

〈例文〉ア 「右側を歩きましょう」という校内のルールは誰も守っておらず「」となっている。

イ 大きな蜂が部屋の中に入ってきたが、彼はいつも通り「」としてあわてなかった。

ウ 企画資料を拝見しました。「」に申し上げますが、この企画にはいくつかの問題があります。

エ せっかく留学するのなら、文法の誤りなど「」は気にせず、どんどん英語を話すと良い。

オ 「」の物語は、幼い子どもたちに道徳心を養わせる良い教材である。

〔六〕 次の(1)・(2)の a、b、c の各文の —— を引いた部分の説明として、最も適当なものをそれぞれ後のア～オから選び、記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

(1) a 短く、はかないカゲロウの命。

b あそこは、キリンがいない動物園だ。

c 一月にしては、寒くない日だね。

ア 動詞の一部 イ 形容詞 ウ 形容詞の一部 エ 助詞 オ 助動詞

(2) a 宿題をただちに|する|ように。

b 進路についての議論を積極的に|する|。

c 今日の昼ごはんはシチューに|する|。

ア 形容動詞の一部 イ 副詞 ウ 副詞の一部 エ 助詞 オ 助動詞の一部

